

## トランペットは 海に捨ててもいいの？

NHKの朝の連続テレビ小説をご覧になっている方も多いかと思います。うちの母親も、「てっぱん」が始まる頃になると突如テレビの前に現れます。

主人公の村上あかりは、高校のバスバンドでトランペットを吹いている女の子。彼女が尾道の港でトランペットを海に投げ捨てるお婆さんに出逢う所から物語は始まります。トランペットを海に？！と思われた方がいらっしゃるかも知れませんが、大丈夫。そんなことでラッパ（愛をこめてしばしばこう呼ばれます）はへこたれませぬ。何せ、金属できていますから水に濡れてはっちゃらです。

トランペット（その他の金管楽器も含めて）の主な材料は真鍮。黄銅とも呼ばれらる円玉の材料と同じです。英語では「 brass」。銅と亜鉛の合金です。銅は柔らかく展びやすい金属ですが、そのままでは柔らかすぎるため、亜鉛を混ぜて強度を増しています。混ぜる比率によって金属の硬さはもちろん、音色が変わります。

どんな楽器でも使い続けるためには、メ

ンテナンスが必要です。金管楽器のメンテナンスは、楽器をパーツにばらして、洗剤で洗って、水ですすぎます。こんなことができるのは金管楽器だけ。ただ、仕上げにはきちんとオイルをさしておかなければなりません。

金管楽器は唇の振動を伝えて音にしますが、その音階のつくり方は実に数学的で、たった3本のピストンでトランペットにあらゆる音が出せることを不思議に思わない方が不思議でしょう。

同じ長さの管で出る音は一つではなく、いくつかあり、これを倍音ばいおんといいます。例えばトランペットのピストンを全く押さえない状態では低いドの音が基本の音になり、唇の締め方をうまく調整することで、他にソとミの音（倍音）が出るのです。3本のピストンは、それぞれが長さの違う管につながっていて、それらを押さえることで管の長さが変わり、音が変わります。押さえる方は、①何も押さえない、②1番だけ押さえる、③2番だけ、④3番だけ、⑤1番と2番、⑥1番と3番、⑦2番と3番、⑧全部押さえる、の8通り。（ただし、④と⑤では管の長さと同じですから7通り）これだけの指のパターンに、倍音を利用すれば多

くの音が出そう。実際に2オクターブ少しの音が出せます。実は、同じ指の形で違う音を出すことこそが難しいのですが…。

ところで、このようなピストンが登場したのは19世紀頃。それ以前の管長を自在に変えられないトランペットは「ドとミとソ」のように限られた音しか出せません。音を変えるためには、その音の出る楽器と交換するか、または管の一部を差し替えて長さを変えてやらねばならなりませんでした。ベートーヴェンなどの交響曲でトランペットがまるで打楽器のような扱いをされているのはこのためです。メロディを吹こうにも吹けなかった事情があるのです。

しかし、現代ではトランペットのソロと言えば本当にカッコいいですね。

このように、音楽の発展は楽器の発達と深い関係があるようです。

それにしても、楽器を捨てようなんて考えないでくださいね。ゴミの分別表にだっているのってないですから。

